



# 世話人40年

新潟市西蒲区 石田 照男さん(75歳)

復刊103号

# 妙たえの光ひかり

妙光寺は地区ごとに出選された方を中心に、23名の世話人の合議で運営されている。石田さんもその一人で、このたび75歳の定年を迎え退任された。35歳の時やはり世話人を務めていた父親が農作業中に脳溢血で倒れ、半月後に亡くなった。若すぎるからと固辞したが、周囲の薦めで後を引き継いで世話人となり、以来40年間に及んだ。

11年前、人生最大の危機が訪れた。妻、美枝さんとの突然の別れだった。平成17年の正月6日夕刻、美枝さんは勤務先での仕事始めを終え、帰宅途中に交通事故に遭った。美枝さんはまだ62歳だった。

事故のあった時刻に石田さんの携帯電話が鳴ったような気がした。この日は仕事後に二人でホームセンターへ買い物に行く約束をしていたので、その連絡だろうと何気なくかけ直したのだが応答はない。警察からのその知らせはかなり経ってからだった。(2ページに続く)

## 行事案内

### 関東地区お盆参り

7月中旬

関東地区の檀徒宅に、お知らせのうえでお盆のお参りに伺います。



### お盆参り、施餓鬼法要

8月1日(水)

- ◆午前 6時～10時 墓前の読経受付
- 午前10時30分 安穩廟法要
- 同 11時 本堂で施餓鬼法要と新盆法要
- 昼 12時 おとき
- 午後 1時 法話



### 新盆法要

ご希望で8月1日(水)か5日(日)

新盆にあたる全ての精霊のお位牌を本堂に安置し、ご供養します。関係のご家庭には直接お知らせしますので、ご参列ください。檀徒以外の方の新盆供養もお受けします。お問合せ下さい。

### お盆棚経

8月初旬～16日(水)

旧新潟市内、県内遠隔地は、連絡の上で8月初旬から。近郊のお宅は従来の日程で伺います。予定を知りたい方、お留守になる方は8月1日以降にお電話ください。

### 岩屋七面様祭礼

8月19日(日)

午前10時、本堂にて法要とお加持。岩屋に移動して法要。  
お昼にお赤飯のご供養があります。ご自由にお参りください。



### 万灯のあかり—妙光寺の送り盆

(第28回フェスティバル安穩) 8月25日(土)

どなたも参加いただけます。詳細は別紙パンフレットをご覧ください。

### 秋季彼岸会法要

9月23日(日・祝)

- ◆午前10時30分 安穩廟法要
  - 11時 本堂にて彼岸会中日法要
  - 昼 12時 おとき
  - 午後 1時 住職法話
- 予約不要ですので、自由にお参りください。



しんぎょうかい

### 月例信行会

7月1日、8月5日、9月2日(毎月第一日曜日)

- ◆午前7時～9時 ◆予約不要
  - ◆会費 1,000円(当日賽銭箱にお願いします)
- お参りと法話、軽い作務、朝粥の朝食やコーヒータイムがあります。

### 月例ボランティア 毎月15日

7月15日(日)、8月23日(水)、9月15日(土)

※8月のみ23日に変更

- ◆午前9時～12時 午後1時～3時
- 7、8月は送り盆の準備、9月は清掃作業等です。たくさんの皆様のご協力をよろしくお願い致します。



### 身延山・七面山団体参拝旅行

9月29日(土)～10月1日(月)

参加申込受付中です。詳細は別紙パンフレットをご覧ください。

### お寺でヨガ 毎月第3木曜日

7月19日、8月16日、9月20日、10月18日

- ◆午後2時～3時15分
  - ◆参加費 一回700円
  - 持ち物 ヨガマット、もしくはバスタオル
  - 講師 ノリコさん
- どなたでも参加できますが、予約制です。その都度電話での連絡をお願いします。



### あ と が き

いつも元気な院首夫人の突然の病気に、やや動揺しながら妙光寺の夏が始まりました。今は元気?に闘病しております。(くわしいことは「なぎさから」をご覧ください。)今号の「妙の光」は全面カラー化に続き、増ページに挑戦しました。印刷代は変わらないそうですから、ご安心を。どうぞ、感想をお寺にお寄せください。

(新倉理恵子)



新潟市西蒲区 石田 照男さん (75歳)

妻の美枝さん



電話があったと言うと、その前に即死だったはずだと警察は言った。「最期の助けを求める叫びだったのかなと思う。妻が追突したとされ、解剖までされたが酒も薬も飲まない慎重な妻がなぜと、今でも事故原因に納得がいかない。夢にも出てこないんだ」と当時を振り返る。

続く苦難

16歳の春には、母親が田んぼのハザ木と車の間に挟まれて大けがをする事故に遭った。農業高校定時に合格し、その入学式当日のことだった。長男として働かざるを得なくなり高校は断念。農業を手伝いながら講習を受けて自

動車整備士資格を取り、その後勤務した運送会社で大型特殊免許も取った。

妻の死後、ようやく元気を取り戻した8年前に検診で自身に肺がんが見つかる。2時間半の開胸手術で無事生還、今再発の不安はない。しかし長年の無理がたたつてか、腰痛と背骨の圧迫骨折で、3年前から湿布薬が欠かせない。「今年春の50反の田植え作業は息子や孫に頼り、眺めているだけで何もできなかった」と言う。

世話人として

苦労続きの人生だが、世話人40年間は奇しくも院首(前住職)の在職期間と重なり、思い出深い。客殿建替工事・住職の結婚式・安穩廟の計画から資金繰りと続いた。本堂の建替工事では建設委員を務めた。開創700年大法要は若い人が活躍して大成功。昨年の法灯継承式も無事終えられてほっとしている。



日覚上人の書かれたご本尊

なんといつても忘れられないのは、内藤さん、高橋さん、小林さん3人の世話人の先輩たちのことだ。いまでこそ境内の排水も整備されて立派になったが、以前は度々沢が氾濫して境内に水が溜まり客殿は床上浸水した。「世話人みんなが頑張ったが、特にこの3人は、いつも自分の家の仕事を差し置いて沢を掘り、管を伏せる等、手作業で汗を流していた。今の妙光寺があるのはこの人たちの力が大きいことを忘れてはならない」と語る。

心の支え

石田家は農家だがその歴史は

長く、3人の僧侶を輩出している。なかでも明治初期に妙光寺45世住職として4年間在職した日覚上人は、僧侶育成の檀林で講師も勤めた。妙光寺に入寺する前は現在の岡山県で住職していたとの記録がある。お寺との深いつながりは、石田さんにとって辛いときの気持ちの支えになった。

自身も妙光寺の団体参拝で総本山身延山に4回お参りし、3回は標高2kmの七面山に登った。山頂の宿坊に泊まり富士山から昇るご来光を拝めることで有名だが、1度しか拝めていない。次回も参加したいが、4時間の山道はもう無理なので、久遠寺周辺のお寺巡りコースにするつもりだ。

一昨年には、共に歩んできた住職による最後の生前戒名授与という事で、戒名も受けた。体調が優れない最近酒の量が増えがちだが、機会があればお参りは欠かしたくないと語る。

安 穩

小川良恵

女性僧侶として

僧侶は男性というイメージが強いのか、住職になってからも外へ出ると「珍しいですね」と言われることがあります。また、聞いた話ではありますが、未だに「尼僧さんはちよつと……」と言われる風潮もあるようです。けれど、お釈迦様の時代から女性の僧侶はいましたし、日本で最初に出家したのは女性であるという記録も残っています。

法華経の『提婆達多品』にこのようなお話があります。仏教の目的は成仏することですが、古来、女性は劣った存在であり仏に成る

成満の許証を授与される



ことは出来ないという差別されています。お釈迦様の一番弟子である舍利佛や智積菩薩でさえも、これを信じていました。そのため、童女の娘で、幼い童女という女の子が法華経によって成仏したという話を聞くと、その真偽を疑って「女性に汚れた存在で、仏様になる器ではない」と疑問を口にしますので。童女は、これを聞いた後、「汝が神力を以つて、我が成仏を觀よ」と、大勢の前で一度男性の姿に化身をして、宣言どおり仏になって見せた、といひます。実は私は、はじめ、この物語を聞いて、「なんだ。女性が仏になるには、一度男性の姿にならなくてはいけないのか。では、やはり女性の身体が汚れているという教えがあるのだろうか」と感じました。しかし、最近の研究では、実は童女はすでに女性のまま成仏しており、男性に化身する必要は無かったと言われています。舍利佛達が、言葉だけではどうしても、女性の成仏を理解出来なかった

ので、彼らに真実を教えるために、わざわざ変身してみせたのだというの有力な解釈のようです。有り難いことに、私の周りには舍利佛のような男性はおられません。女性として男性と同じように出来るのだという教えはこれからは強い支えになると感じています。

大荒行を終えて

さて、五月二日から二十三日までの三週間、岡山県にある最上稲荷山大荒行堂に入行して参りました。日蓮宗の荒行と言えば、千葉県中山の遠壽院や法華経寺の百日間をご存知の方も多いでしょう。中山の荒行堂は、肉体的に厳しい修行なので男性僧侶のみが行なわれ許されていますが、最上稲荷山は女性僧侶でも修行出来るのが大きな特徴です。日数こそ5分の1の3週間ですが、早朝4時からはじまる一日7回の水行、荒菰(あらかも)の上で正座による朝勤・昼勤・夕勤の読経、「南無妙法蓮華経」のお題目を唱え続ける唱題行など、修行の内容は変わらないようです。振り返ってみれば、足の痛みや喉のかれもあ

り、1日が3日に感じられるような長い21日間でしたが、とても有意義な時間でした。



最上稲荷山妙教寺

荒行を成満すれば(修行を終えれば)、木剣(ぼっけん)による加持祈禱を行うことが出来ます。妙光寺では、毎年4月の御判様で、その年に修行を終えた僧侶の水行やお加持を行なっています。私も来年は皆様の前でお加持が出来ればと考えております。さすがに、水行は出来ませんが……。女性であっても男性僧侶と変わらずにお勤めすることが出来ると、あらためて感じています。

◆連続浄土講座



第4回目『葬儀の仕事 ～働いてみたらわかったこと～』4月15日㊤  
大手葬儀会社で10年近く働いていた浜ゆりこさんが、葬儀の今とご自身の体験を語りました。



浄土講座特別企画

『金子みすゞの心を歌う ～ちひろコンサート～』

5月27日㊤

安穩檀徒の小幡さんご夫妻による「奉納企画」。生誕115年を迎えた童謡詩人・金子みすゞの詩に曲をつけたシンガーソングライターのちひろさん。100人を超える参加者が、そののびやかで美しい歌声に酔いしれました。

後半ではなごやかに、良恵住職とのトークも行われました。



第5回目『いのちの主人公はあなたです ～在宅ホスピス医からのメッセージ～』6月24日㊤

医師の内藤いづみさんが、生と死への向き合い方をホスピス医の体験から語り、互いのいのちを支えることの大切さを学びました。内藤さんは、8月の『送り盆』にもゲストとしてお出でいただけます。

◆『万灯のあかり～妙光寺の送り盆～』に向けて



恒例の大蓮作りや灯籠の組み立てが始まりました。皆さん慣れた手つきで作業は進みます。今年の『送り盆』は8月25日です。



◆役員総会 6月10日㊤



総代と新旧役員25名の出席で、予算決算・事業の報告と計画などが話し合われました。定年で退任される石田照男さんと羽生信二さんには永年の労をねぎらい、感謝状が贈られました。



寺のうごき 春



◆春の彼岸会 3月21日㊤

今年は寒い一日でした。そんな中でも防寒着を着て墓地へ向かうお参りの皆さん。



◆御妙判お大会 4月29日㊤

晴天に恵まれた『ご判さま』祭礼。日蓮上人を偲ぶ法要に、たくさんの信者が訪れました。



山門では住職他式衆がご妙判をお迎えます。13人の稚児が、その後ろに控えます。



題目堂からご妙判のをせた御輿が出発します。八重桜咲く参道を抜け、山門へ。



良恵住職が執り行う、初めてのご妙判お大会。その初々しい読経が本堂に響きます。



100日の荒行を終えた修行僧による水行。



裏方でお大会を支える檀信徒のみなさん。お斎の準備や、受付案内など大忙しです。



## Q 七面様とはどのような神様ですか？

妙光寺の裏手に、『岩屋』と呼ばれる大きな洞窟があります。昼でも薄暗く、足元には賽の河原を模した石が積まれ、`あの世への入り口、とも語られてきました。その昔、ここに七つの頭を持つ大蛇が住みつき、悪事を働いていました。これを佐渡配流の途次角田浜に漂着された日蓮聖人が、地元民の願いで教化（きょうけ 教えを説き改心させること）されたと伝えられています。

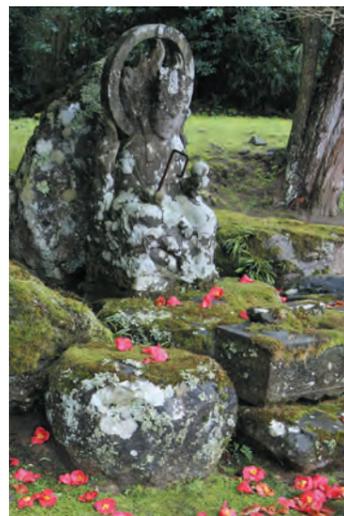
改心した大蛇は「これからは『法華経』 信仰者を守護します」と誓い、身延山裏手の七面山に移り、以来七面大明神（七面様）として各地の日蓮宗寺院でも祀られるようになりました。七面大明神発祥の地が妙光寺の岩屋とも言い伝わるゆえんです。

七面大明神は、七面天女とも言われる女神です。左手に仏様の教えを象徴する宝珠を、右手にその教えの扉を開く鍵を持っています。仏教には八幡神や鬼子母神など仏様を護る様々な神様がおりますが、七面大明神はとくに『法華経』 信仰者を護る神として日蓮宗で大切にされてきました。

妙光寺本堂には江戸時代のものでされる七面様の木像があり、境内には古い七面様の石像があります。そして七面様の姿を彫った江戸時代の木版も、伝わっています。また、毎月19日に月例法要、8月19日は『岩屋』で年大祭を行なっています。



本堂の木像



境内の石像



木版画



## 誌上法話

小川良恵

## 南無妙法蓮華経 序品第一

## けつじゅう 結集

『法華経』の第一章序品第一は、「じよぜがもん 如是我聞」つまり、「私はこのように聞きました」という文言から始まっています。『法華経』はお釈迦様が直接書かれた経典ではなく、その弟子たちが「お釈迦様はこのような教えを説かれていた」ということを、会議でまとめた経典であるからです。これをけつじゅう 結集といい、編纂のため複数回行われました。

### お釈迦様の説法を聴く者たち

序品第一には、最初に、これからお釈迦様の説法が始まるりょうじゆせん 靈鷲山へ、人間と人間以外のありとあらゆる生き物が集う様子が説かれています。出家した僧侶、在家の修行者、菩薩や天界の神々、竜王や鬼神など、聴衆の数は数十万を超えます。神々や竜王、鬼神までいるというのは、生きとし生けるもの全てを救う仏教の教えを表しています。

### 仏様との出逢い

お釈迦様は皆を前にして、法華経の序論にあたる『むりょうぎぎょう 無量義経』を説かれた後、むりょうぎざんまい 無量義三昧という瞑想に入られます。すると天から花卉が降り注ぎ、大地は揺れ、お釈迦様の眉間のびやくこう 白毫から

光が放たれるという不思議な現象が起きました。眉間の光は、東の方角を遙か彼方まで照らし、数多の世界で諸々の仏たちが説法している姿を映し出しました。

これに驚いた聴衆のひとり、みろくぼさつ 弥勒菩薩が理由を文殊師利菩薩に尋ねると、これはお釈迦様が法華経を説かれる前触れであると答えられました。文殊師利菩薩は、過去世において今とそっくりの光景を見たのだと語り、その場には弥勒菩薩の過去世の姿もあったことを明らかにされました。弥勒菩薩は過去世の名をぐみょう 求名といい、名譽欲に囚われた人物でしたが、善行を重ねたことで、いちおくこう 一億劫、つまり非常に長い時間たった一度しか会えぬとされる仏に、数多く出会えたのです。そして弥勒菩薩となった今はまた、将来は必ず、計り知れない数の生きとし生けるものを救う仏になるだろうと予言されます。

このことは、『法華経』が今はじめて説かれるのではなく、遙かな昔から様々な場所で説かれていた、真理であるということを示しています。しかし、『法華経』を説く仏様に出会える機会は非常に稀であるため、心してこれから説かれる『法華経』を聞きなさい、というのが『序品第一』の大切なところなのです。

# 「法灯継承記念誌」 編集長とデザイナーが語る



法灯継承記念誌『妙光寺のこれまで』、そして、『これから』は大好評でした。感想がたくさん寄せられ、今も「一冊ほしい」という声があります。幾度も東京からおいでいただき、記念誌制作に尽力して下さいましたお二人に、お話をうかがいました。

## 妙光寺との出逢い

最初に、妙光寺とのご縁を聞かせてください。

**碑文谷** 私は一九九〇年に雑誌『SOGI』を出版する会社を立ち上げました。その年に、第1回フェスティバル安穩が行われて、『SOGI』副編集長の宗田裕美子が妙光寺取材し、『SOGI』創刊号にフェスティバルの記事を載せました。宗田は井上治代さんが当時活動していた市民団体「21世紀の血縁と墓を考える会」

(エンディングセンターの前身)にも参加していて、私も当時から、妙光寺のことを聞いていました。私自身のフェスティバル参加は、第2回からです。

**かも** 私は……全く覚えていないんですが……『SOGI』第2号からデザインを担当するようになって、そこからのご縁です。あの頃は、まだ紙にデザインを手で描いていました。写真も光をあててサイズを変えてレイアウト用紙に図柄を手描きする、という今では考えられないアナログの世界でした。コンピュータで

やるようになるなんて、想像もしませんでした。

**碑文谷** かもさんが最初にやった妙光寺の仕事は、一九九五年第5回フェスティバルの後で出した『妙光寺の夏』という本です。フェスティバルに参加できなかった方々からの内容を知りたいという要望に応えるために、作成したブックレットです。青い表紙のデザインだったなあ。(後日確認したところ緑色でした)

**かも** うわあ、全然覚えてない……(笑) その時も、紙に書いて制作です。

## フェスティバル安穩

90年代のフェスティバル安穩は、スタッフも参加者も全国から来られていましたね。

**碑文谷** 日本最初の永代供養墓は、比叡山にある久遠墓です。ただこれは、社会的なインパクトはありませんでした。全国に知られる永代供養墓の最初は、一九八九年に開設されたここ妙光寺の「安穩廟」です。小川英爾住職と井上治代さんの協力の力で、後継者不

要の墓としての意義がフェスティバルを通じて発信されました。そして報道機関の若い記者の皆さんの協力も得て、全国に知られるようになりました。もともと単身で墓の跡継ぎがいなかったりして、「お墓をどうしよう?」と困っている人は、全国にいたんです。でも「安穩廟」ができたことで、その需要が目に見えるようになりました。

一九九〇年は戦後45年です。

その年に「安穩廟」が注目されたことには、何か意味があるんでしょうか?

**碑文谷** それはやはり一九五五年に始まる高度経済成長ですよ。田舎の若者がどんどん都市に出て、そこで家庭を築き、家を建てた。30年ほど経って、その人たちが亡くなり始めて墓を必要とするようになった。しかし核家族化も進んでいて、従来の家の墓のシステムだけでは収まらない問題が出てきていたんです。第1回のフェスティバルには、後に散骨に



**碑文谷創さん**  
葬送ジャーナリスト。2016年10月まで25年間発行されていた日本最初の葬送文化専門雑誌『SOGI』編集長。院首小川英爾の大切な知恵袋のおひとり。



**かもかよこさん**  
雑誌デザイナー。桑沢デザイン研究所卒。「送り盆」のパンフレットと『妙の光』のデザインをボランティアで引き受けて下さっている。最近終えた仕事は、羽生結弦写真集のデザイン。

取り組む人たちが、生前契約のNPO法人を始める人たちも参加していました。日本のお墓問題の「火つけ役」になったと言えます。

フェスティバルの初めの数年は、本当に大変でした。理解してくれる僧侶も少ないし、スタッフの中心は角田の檀徒さんと私たち県外勢。みんな若かったので何とかやれたんですね。数年してから菊池上人や松脇上人など、生と死と寺のことを真剣に考えている若いお坊さんたちが参加するようになって、雰囲気が変わっていききました。檀徒さんに加えて、全国から若い僧侶、若い記者、問題意識をもった若・壮・老の人々が集まり、

模索が始まりました。

## フェスティバル安穩から「送り盆」へ

二〇一〇年夏の第21回からフェスティバルは「送り盆」と名称変更しました。

**碑文谷** 当初は県外のスタッフが多いフェスティバルでしたが、もともと寺は地域に根付いているものです。地域あつての寺、なのです。私は初期からいずれば地元のスタッフを中心にすべきだと思っていたし、同じ考えの人は多かった。それが機が熟してきて、地元スタッフもたくさん生ま

れてきて、「送り盆」になったのです。20回を重ねて、理想の形になったということですか?

**碑文谷** 檀信徒さん、地元の人たちが中心になり、いい形になったと思っています。でもフェスティバルという名前が頑張った20年は大切な時間でした。何年かスタッフとして県外から妙光寺に通った人たちが、その後あちこちで活躍しています。みんな妙光寺で培った問題意識をもって、日本中で動いています。妙光寺は開かれた寺ですから、「送り盆」と名前を変えても、そういう場所であり続けるでしょう。

Q 日本最初の葬送ジャーナリストである碑文谷さんは、「安穩廟」の現在をどうご覧になっていますか？

碑文谷 永代供養墓はあちこちで作られています。現在でも永代供養墓の意味・理念をきちんと理解している人は少ないです。僧侶であっても、昔から寺にある無縁墓をちょうどきれいにしたのが永代供養墓だと思っている人もいます。私は、人間である限り、たとえ家族がいない人でもどんな人でも申われる権利があるし、遺された者には申う義務ではなく申う権利がある、と考えています。



寺は、それを受け入れ守るものではない。そういう寺墓であってほしい。「安穩廟」は最初から、婚姻という枠にとらわれず、すべての人に等しく開かれています。

### 妙光寺の発信をデザインする

Q 「雑誌デザイナー」というのは、どんな仕事ですか？

かも 妙光寺から原稿と写真を受け取って、その配置から文字、色やカットなどをデザインします。

Q 最初は、「送り盆」パンフレットのデザインをボランティアで引き受けて下さったんですよね。

かも 藤田弓子さんがゲストだった二〇〇八年の第19回フェスティバルからです。碑文谷編集長からお話をいただいて、素敵なお寺さんだなあと思っただけでやらせていただくようになりまして。いつもどんなお寺さんだろう、と想像しながら仕事をしました。

Q 初めてかもさんが妙光寺に来たのは、二〇一〇年ですね。「送り盆」で万灯のあかりをともそつと計画しているときでした。

かも そうです。とにかく、きれいなお寺さんだと思いました。街中の狭いお寺さんしか知らなかったの、閑静で気持ちよくて、遠い方々も家族旅行として墓参りをしたいと思う人もいるだろうなあ、と思いました。

Q かもさんには、その後「妙の光」のデザインも引き受けていただきました。プロのかもさんに、これもボランティアでやっていただいていたんです。

かも 『妙の光』は、二〇一一年の73号からです。もう30号分。前住職の志に共鳴し、制作させていただきました。

Q 編集担当として、いつもお世話になっています。新住職になって初の102号は、明るい色で若い女性住職を表現していると思いました。

かも わかりました？ 良恵さんが新住職になられて、全ページカラーになったので少し明るめの色とカットを入れました。

### 法灯継承記念誌をおして見えたもの

Q 法灯継承記念誌の編集について、聞かせてください。

碑文谷 企画編集の作業は、昨年4月から始めました。妙光寺の歴史を確認し、この30年間に築いた理念を整理して、これからの妙光寺につながる内容のものにしたいと考えました。今まで妙光寺が模索してきたことを、新住職に引き継いでいくという宣言です。

かも 継承は本当にうれしいです。この継承記念誌が、これから「安穩廟」を求める人や遠い未来の良恵さんの継承者にも、読んでもらえるといいなあと思っています。

Q 編集作業の中で、感じたことを聞かせてください。

碑文谷 檀信徒さんたちと妙光寺の関係が実感をもつて見えてきました。例えば、梵鐘の再建のエピソードです。鋳型に銅と錫を流し込む瞬間に立ち会うために、檀信徒さん達とともに滋賀の鋳造所に出かけて、8月の暑いさなかに汗を流しながらお経をあげたという話を前住職から聞いて、「檀信徒とともにお寺が創られてきた」ということが、具体的によくわかりました。53世小川英爾住職は確かに異能の人だけれど、妙光寺は小川さん一人のものではない。今までも、これからも、いろいろな人が担って皆の力でやっていく寺なんです。

かも あまりの歴史の長さ素材の多さとかかわる人たちが多くお寺さんで、途中でめまいがしそうなくらいでした。

碑文谷 写真をたくさん入れましたが、前住職が、なるべく大勢の檀信徒さんの写真を入れたいと、こだわって写真を選びました。それから、なごき夫人と2人で測量をしている写真がP28にあります。これも必ず入りたいと、前住職がこだわりました。夫人への愛情を感じましたね。

かも 妙光寺のすべてを証言する本になりましたね。

碑文谷 どこから開いて読んでも、わかる内容にしたつもりです。時間のある時に、興味のあるところから



読んでください。私の言いたいことは、編集後記にまとめて書きました。「妙光寺は」700年にわたり寺を地道に支えてきた檀信徒たちの、自分たちの寺を生かそう、という熱意と参加の賜物である。「これは、実感です。妙光寺は、現代に生きている寺です。そして「寺が生きている」とは

どういふことかを、模索している寺です。そのことがわかつてもらえる「法灯継承記念誌」になったと自負しています。

すてきな「記念誌」をありがとうございました。

(聴いた人 編集部新倉理恵子)

戦争が終わって73年目の夏を迎えました。3年前の二〇一五年秋、妙光寺では終戦直後の長崎を撮影したジョー・オダネル氏の写真展を開催し、約千五百人にご来場いただきました。

石田さんは安穩檀徒で、10年前ご夫婦で生前法号を受けておられます。

このたび、今も記憶に新しい写真展の感想をお寄せいただきました。73年前、少年の眼前に広がった惨状に思いをはせ、みなさんと共に平和を願う夏したいと思います。



## 写真「焼き場に立つ少年」 新潟市中央区 石田 洋子

私の脳裏に焼きついた1枚の写真である。長崎に原爆が投下された直後に撮られたものだ。3年前、角田山妙光寺にて写真展が開催されたとき、初めて目にした。

1945年8月、当時のアメリカ軍が原爆の破壊力を記録するためフォトジャーナリストであるジョー・オダネルを長崎に派遣したことに始まる。その時、惨状を目の当たりにした彼が密かに撮ったという50数点のモノクロ写真が展示されていた。その中の1枚が、題名の写真である。

その写真の前では、訪れた多くの人が立ち止まり、私も釘づけになった1人である。その少年は赤ん坊を紐で背負っていた。しかし、赤ん坊の首は大きく傾き、すでにこと切れているようである。地面には竹のような棒が数本、仕切りのように置かれている。まだ幼さの残る少年が、その前に裸足で立っている。両手両足はしっかり揃えられ、真っすぐ前を見つめている。唇を引き締め、その姿からは厳かな雰囲気が見る者に伝わってくる。

家族を皆原爆で失ったのだろうか。幼子を哀れんだ兄は、せめてその子だけでも葬ろうと焼き揚を探しあて、たどり着いたのかと想像してみる。

後にジョー・オダネルは語っている。「アメリカでは、このような少年を目にすることはない。毅然とした少年の姿は驚きだ。赤ん坊を焼き揚にそっと降ろした彼は、黙々と丘を登って行った。後を追ひ、慰めたいと思ったが出来なかった」と。帰国後は、国の監視の目を恐れ、写真類はトランクの奥に50年間もしまわれたままだったそうだ。その後、その思いは自分の息子に託されたそうだ。この写真は後に、ローマ法王が「戦争の結果」とするメッセージを添えたカードにして、核軍縮シンポジュームの参加者に配ったことを知った。

写真展を見終えた夫と私は、参道を歩きながら会話は少なかった。そんな中「あの少年は、その後生き延びることが出来たかしら」という言葉が、私の口からついて出た。

その写真の残像は、いつしか幼少のころに見た光景につながっていった。終戦の年、私の一家は戦禍を避け、名古屋から父の実家のある村上へ疎開することになった。出発地となる名古屋駅の混雑ぶりはひどかったというが、当時4歳の私には、おぼろげな記憶だけである。ただ、そこへ向かう道すがらの情景だけは、今も思い出すことが出来る。道の両脇には、私と年恰好が似ている子ども達が大勢いた。大抵の子どもは力なさそうに地面に横たわり、中には目をつむっている子もいたと記憶している。

座っている子は、道行く人々に向かって必死に手を差し出している。私の手を引いていた母が、「お腹空いてるんだね。上げられる物なにもない」とつぶやいた。私は次のような言葉で疑問を投げかけたと思う。「ねえ、どうしてあの子たちここにいるの」その答えは私に怯えのような記憶を残した。「お父さんやお母さん、みんな戦争でいなくなったんだね」。

もう70余年も前の忘れ得ぬ出来事だ。だけど段々そのシーンの映像が、薄茶色にぼやけて遠い日になりつつあった。この日の写真展が一举に、幼少のあの時に見た子ども達の姿と重なった。苛酷で哀しい運命に遭遇した子ども達は、どれほどいたのだろう。

私たちは妙光寺の参道を歩き続け、それぞれの思いに浸っていた。背後に控える角田山はうっそうと秋の気配が色濃くなり、寺の境内にせまるかのようだ。

定例役員会議と役員改選

6月10日に定例役員総会を開催し妙光寺の1年間の収支決算、来年度の計画と予算案を承認しました。また今年は3年ごとの改選期に当たり、羽生信二、石田照男の二人が定年退任され、新たに内藤賢吾、羽生ミユキ、石田雄一のお三方が就任されました。



新人事

小川なぎさ(住職の母)の1年間の病気療養のため、事務の柿崎さんに加えて新たに2人の臨時職員をお願いしました。柿崎さんの補佐を中心に不定期の出勤ですがよろしく願います。

●石田博道 グラフィックデザインを本業とし、妙光寺ではパソコン作業を暫時担当。地元巻在住のソフトな青年です。

●榎谷花子 以前妙光寺で勤務していた住職の妹、綾の中高の同級生です。「一級葬祭ディレクター」資格を持つ元気な女性です。



浄土化事業進む

昨年度は新たに1,274,500円のご寄付を賜り篤くお礼申し上げます。「浄土講座」3回分173,101円、法灯継承式補助500万円(客殿畳替え等を含む)。今年度繰越残金8,956,979円となりました。今後は2回の「浄土講座」、送り盆ゲスト講演補助、大変要望の多い参道の舗装、客殿大玄関手摺り工事等を予定しています。また耐震工事が必要とされている山門の改修ができないか検討中です。引き続きのご協力をお願い申し上げます。

『安穩廟』30年と一部増設

平成元年開設の「安穩廟」が30年目を迎え、昨年夏に全区画満杯となって受付を停止しました。しかしその後希望者が絶えず、既存敷地内で40区画を増設中ですが、既に半数が予約済みです。今後は、安穩廟の30年を検証して、妙光寺における「安穩廟」の位置づけを再確認し、将来のことを役員会で相談していきます。

山側墓地崩落の危険と移転計画

この冬の大雪で従来の山側墓地の一角が崩落しました。以前から指摘されていた危険箇所です。斜面の土留め工事は経費上無理ですので、前の平坦地に移転できないかを検討します。

ホームページ一新作業中

全国からのアクセスが大変多いホームページですが、制作してから年数を経て形式も古く内容も多くなり、更新も遅れがちです。住職交代の機会に、全面改定を目指して作業中です。夏までには一新します。ご期待ください。

年会費のお願い

年会費のご案内を同封しました。遠隔地の方には昨年より、銀行口座引落をお願いしています。寺で行う事務処理の負担が大きく、一部に不慣れによるミスもありご迷惑をおかけしました。郵便振替より手数料も安く概ね好評ですので、ぜひとも、銀行口座引落への移行をご協力をお願いします。

新連載

渚から

小川なぎさ



「お休みいただいています！」

ただいま療養中

前回、このお便りで「休養の年にしたい」と書きました。「できないけど」とも。ところが、そのあとすぐに私の頑丈なはずだった胃袋に癌が見つかり、三週間ほどホテル信楽園(西区の病院)でのんびりしてきました。きれいで静かな病室で、遠く雪の残る山々をみながらリラックスしました。もちろん手術もあり色々な検査もあって、どきどきしたし少し怖かったけれど、もともと痛みには強いほうなので辛くはなかった。それよりも、自分のことだけ考えてもよい時間は、本当に休まりました。

お寺では24時間勤務、出かけるときですら携帯電話に電話を転送しなければなりませんから、そこで暮らすことはけっこう大変なのです。院首や住職は生まれも育ちもお寺だから、私よりも精神的には強いかもしれません。「長年の疲れが出たんだよ」と、実家の母は手術のあとそう言って泣きました。そう言われるとそうなのかもしれない、と思えました。少し長く休みたいと思うときはあるでしょう。そう思っただけで、嫌でも休まなくてはならなくなった私は幸運なのでしょうか。これは偶然でしょうか? 必然でしょうか?

病気は転機に

悲しいことになんでも食べられる胃袋は小さくなり、たくさん食べられなくなりました。おまけに進行癌なので1年間は抗がん剤の服用をすることになり、気分が良いのは薬を休んでいる時だけです。今は「死ぬこと意外はかすり傷」と思っています。死ぬ気はしませんでした。死ぬのかもしれないと思つた時でもまったく怖くはなかった。これは、長年お寺で暮らしたことへのごほうびのように感じました。自分よりも残された家族の悲しみや混乱がやっかいだな、と冷静に考えてもいました。でも妙光寺の空気と信仰が家族を癒してくれると信じているから安心できました。

これが休ませていただいていることの顛末です。偶然でも必然でもなく、仏さまのおはからいだと思えるのです。私の病気を機に、お寺では大きな転機、ともいえる変化も起こっています。前々からお寺は奥さんがいなくても成り立つようには考えていましたが、檀信徒、ボランティアの皆さんのご協力で行事や催し物も今まで以上にうまく回っています。もちろん常勤のスタッフの努力もあり、これからが楽しみです。どうぞ今後もよろしくおねがいします。